

映像資料の活用

中国研究科修士課程 佐藤 一道



学部生のときから名古屋図書館を利用している。必要な本はOPAC(蔵書検索システム)を活用し、ただちに手にすることができた。しかし、私にとって図書館に行く本当の楽しみは書籍の森に迷い込むことであった。目的の本を探すのではなく、とりとめもなく歩き、背表紙に書かれた表題を読んでいく。私たち人類はなんと深くかつ多岐にわたって思索してきたのだろう。知の集積に圧倒されながら、私は書籍の森をさまよった。

それとは別に、名古屋図書館は映像資料も調べている。私の学部卒業研究はこの映像資料を使用した。

満洲国の国策会社、満映が作った映画は約1000本あった。その大量のフィルムは40年近く行方不明になっていた。ところが1985年のペレストロイカによって、満映フィルムが旧ソ連にあることが判明した。ロシア国立映像資料館がモスクワ郊外にあり、満映フィルムはそこに秘蔵されていた。

1995年、(株)テンシャープ0がロシア国立映像資料館から日本に持ち帰ったフィルムをビデオ化した。幸い、そのビデオが名古屋図書館に『映像の証言 満州の記録』30巻、『満洲ニュース映画』10巻として揃っていた。

私は毎日、AV自習室に通い全巻を視聴して卒業研究を完成させた。AV自習室の設備は、戦中この映画を見た観客と違い、映画を止めて字幕を書き写すことも、聞き取れなかった言葉を再生することも可能である。この機能を使い映画の細部まで検討できた。

満映について論じた書籍はたくさんある。しかし映画表現されたものは、実際の映画を見るに如くはない。その意味で映画表現を研究テーマとする学生の要求に図書館は的確に応じている。しかし、映像資料の総量がまだまだ足りないように思われる。